

東京女子医科大学看護学会の未来に向けて

宗 村 弥 生 (東京女子医科大学看護学部)

東京女子医科大学看護短期大学を卒業後、少し前まで臨床で勤務していた私にとって、「看護研究」はとても遠いものだった。

看護学部配転になってはじめて、学会に出席したり研究に携わる機会が多くなった。そこでは研究者だけでなく、多くの臨床の看護師たちが研究し発表していることをいまさらながら知り、大変なショックを受けた。実践していることを外に発信し、また外からも求めようとする姿に感激した。

去年は病棟のスタッフと一緒に研究をする機会を得た。かつて勤務していた病棟にまた出入りでき現場の臨場感を味わえるのがうれしいことだったが、今まで自分たちなりに考えてやってきたことを「研究する」ことであらためて考え直し、言語化していく作業をしたことで、やってきたことが確固たるものとなり、自信をもってできるようになっていくことを実感した。これまでは自分の中、またはその場所の中で自己完結していた看護が客観的な根拠に基づいた実践になるのを実感するのはうれしい体験だった。遅ればせながら、私はやっと「研究はおもしろい」、と思えたのである。また、やはり実践あつての研究だということも実感した。病棟で勤務していたときに、もっと積極的にやっておくべきだったと後悔している。

東京女子医科大学看護学会に望むことは、実践と研究が身近になる場になってほしいということだ。この学会の設立によって、病棟と学部がもっとお互いに行き来し、補い合い、学びあう機会が増えることを望んでいる。

また、東京女子医科大学病院はたくさんの科を持つ大変大きな病院である。それぞれの場で工夫し、よい看護を行っている。しかし、せっかくのよい看護がそれぞれの科のもので終わってしまっただけは大変もったいない。お互いの看護を持ち寄り学びあうことで、それぞれの科だけでなく、女子医科大学全体のさらにより看護につながっていくことになるのではないだろうか。東京女子医科大学看護学会の設立が、そのための絶好の場となることを期待している。